

知っておきたい当帰芍薬散の 基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長／内分泌代謝科 部長

出典 金匱要略

当帰芍薬散の出典は、『金匱要略』（張仲景ら・3世紀初頭頃）である。

効能又は効果

比較的体力が乏しく、冷え症で貧血の傾向があり、疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴える次の諸症：月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ

古典に見る当帰芍薬散

出典 金匱要略（張仲景ら・3世紀初頭頃）

『金匱要略』では、婦人妊娠病脈証并治第二十に「女性が妊娠中に、腹部の絞るように痛むものは当帰芍薬散が治療する」、さらに婦人雜病脈証并治第二十二に「女性で腹部のさまざまな疾病に伴う痛みは、当帰芍薬散が治療する」と記されている。

『諸病源候論』（崇元方・610年）

『諸病源候論』では、妊娠中の腹痛が胎盤機能や胎児に影響すること、さらに妊娠中の腹痛は臓の正気の虚と風邪・寒邪の混在により出現し、病態が進行すると胎児は不安定になり、甚だしい場合には流産すると記されている。

『婦人良方大全』（陳自明・1237年）

『婦人良方大全』では妊娠中の腹痛について、風寒の邪に加えて、さらに湿・痰飲が絡むことを示している。

『三因極一病証方論』（陳言・1174年）

『三因極一病証方論』では、当帰芍薬散は妊娠中の腹痛などを治療し、長期処方によって養生をさせるような使い方

があると記されている。また、産後の大量の出血によって口渇を呈する病態や腎の問題が生じている状況に用いると述べられている。

このように当帰芍薬散は妊娠・月経に伴う諸問題に広く使用することが示され、さらに近年の研究では、鉄欠乏性貧血に伴う諸症状を改善することが報告されている¹⁾。

『成蹟録』（吉益南涯）

吉益南涯は、当帰芍薬散を女性以外の病気にも用いた先駆者であり、『成蹟録』では、長年の頑固な腹痛に悩む商人を当帰芍薬散で治療した症例が記されている。

当帰芍薬散の方剤解説（図1）

当帰芍薬散の適応となる病態は「肝気横逆」「血瘀」「肝血虚」「脾気虚」「水湿」である。肝血を補う当帰・芍薬は肝の過剰な気の運動や気的不安定性を改善する。川芎は肝気の流れを改善し、血を巡らせる。白朮・茯苓は脾気を助け、沢瀉は無駄な水分を腎から排泄する。

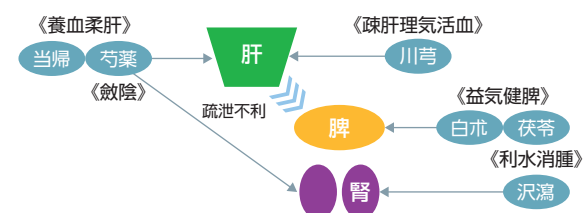
「血」について

● 血の生理作用

血は営気と津液から成り立ち、その生理作用として、組織を潤し栄養して組織の艶を支え、気の動きを円滑にさせ

図1 当帰芍薬散

肝気横逆：腹部の引きつような、差し込むような痛み
血瘀：月経痛、末梢の冷え
肝血虚：眼精疲労、爪・髪の脆さ、月経量低下
脾気虚：下痢、食欲不振
水湿：浮腫、白色帯下の増加



知っておきたい当帰芍薬散の基本と臨床のポイント

て効率よく運び、神経系機能に相当する神を安定化させる働きがある。

● 血の生成

血は、脾で生成された津液と、肺で生成された営気が心で交じり合うことで生成され、全身を循環する。血は、安静時には肝で蔵血され、その間に腎由来の陰精が供給され、さらに涵養される。

当帰芍薬散は、血の生成、貯蔵および涵養の一連の過程を多面的にサポートする作用を有している。

● 血の病証－血瘀、瘀血、血虚－(図2)

「女性の先天は肝」と言われるように、女性の生殖機能は肝が調節していることが示されている。すなわち、衝脈(肝に蔵血されている血)と任脈(腎の精)から女子胞(子宮)に血が供給されることで月経・妊娠が成立すると考えている。「血瘀」は血の運行が停滞している状態である。血瘀が変性すると「瘀血」が生じる。さらに、血が不足した病態が「血虚」である。

● 気虚・血虚

気虚はエネルギーの低下であり、生理機能の低下、倦怠感や息切れ、声に力がない、活力の低下、冷え等の症状が現れる。一方で血虚は、営気と津液の不足であり、気の働きが円滑にできない症状(筋肉のこわばり、眼の疲れ、神経の過敏)と、栄養状態の悪化による症状(爪が割れやすい、皮膚や毛髪が潤いがない、月経量の低下、動けるが休むと疲れて動けない)が現れる。現代医学における有症状性の貧血の症状は、気血両虚の症状と捉えることができ、漢方医学的にはより軽度の症状としての血虚を認識している。

図2 血の病証－血瘀、瘀血、血虚－

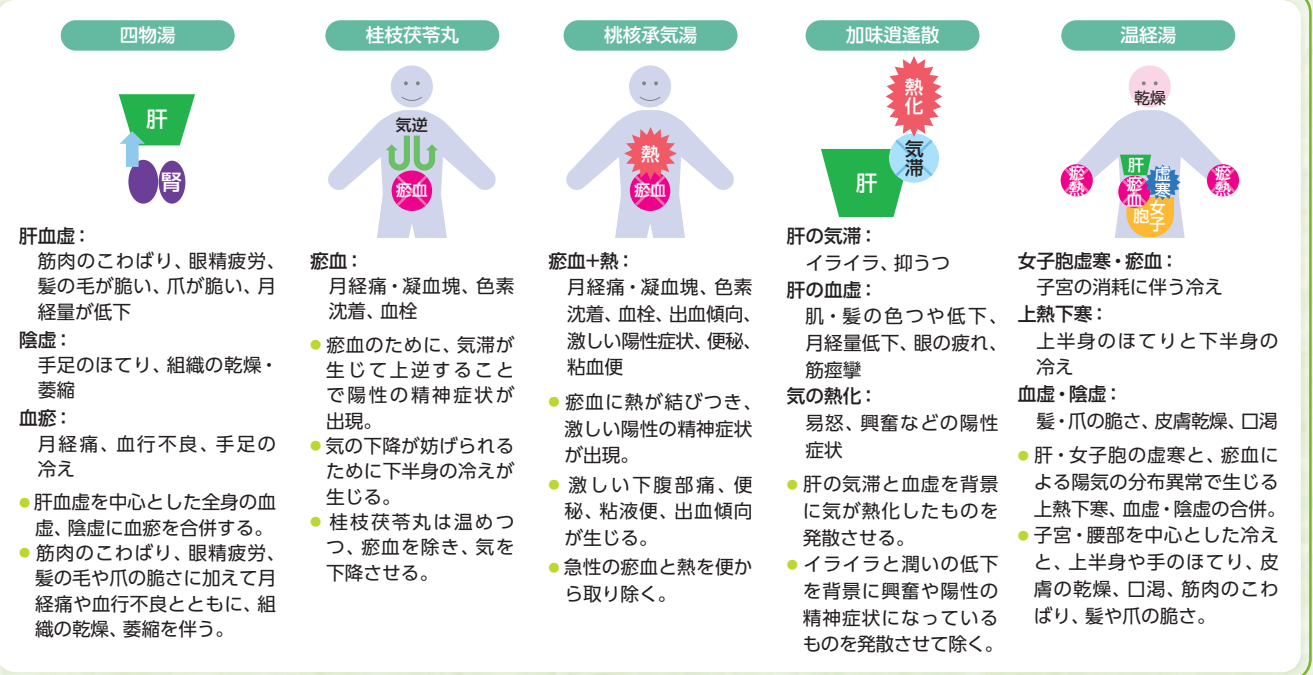


当帰芍薬散の類縁処方との鑑別 (図3)

● 四物湯

四物湯の適応病態は「肝血虚」「血瘀」と「陰虚」であり、肝

図3 当帰芍薬散の類縁処方との鑑別



血虚を中心とした全身の血虚、陰虚に血瘀の合併した病態に用いる。当帰芍薬散はむくみの傾向に用い、四物湯は乾燥、組織の萎縮やほてりなどに用いる。

● 桂枝茯苓丸

桂枝茯苓丸の適応病態は血瘀が変性した「瘀血」である。主に下腹部の瘀血のために気滞が生じ上逆することで気逆を合併しやすい。興奮性の精神症状や上半身ののぼせ様の症状、下半身は冷えるも上半身はややのぼせるような症状が出現するが、桂枝茯苓丸は温めつつ瘀血を除き、気を下降させる。

● 桃核承気湯

桃核承気湯の適応病態の特徴は、瘀血に加えて熱が結びつくことである。すなわち、瘀血の症状に加えて出血傾向や強く激しい陽性症状が出現する。さらに便秘、粘血便などをきたし、出血傾向なども生じるようになる。大黄は、瘀血と熱を便から排泄させる。

● 加味逍遙散

加味逍遙散の適応病態は「肝の気滞」「肝の血虚」と「気の

熱化」であり、肝の気滞と血虚を背景に、熱化した気を発散させる。すなわち、些細なことで怒りやすくなる、あるいは興奮などの陽性の精神症状を発散させて除く。

● 温経湯

温経湯の適応病態は、「女子胞虚寒・瘀血」「上熱下寒」「血虚・陰虚」であり、肝・女子胞の虚寒・瘀血による陽気の分布異常で生じる上熱下寒、血虚・陰虚も合併するというような複雑な症状の呈し方に対して用いる。

現代医療における当帰芍薬散の臨床応用

● 症例1 17歳 女性、主訴：月経の閉止(図4)

本症例は、精神的なストレスにより体重が減少し、その後月経が閉止した。血虚、脾気虚と弁証し、当帰芍薬散を処方した。服用1ヵ月後には冷えと倦怠感が改善、2ヵ月後には腹痛が出にくくなり、体重は4kg増加した。2ヵ月半後には月経が再開した。

● 症例2 16歳 女性、主訴：月経痛、手足の冷え(図5)

本症例は、月経前日から3日目までのひどい腹痛があり、鎮痛剤も無効であった。血虚血瘀、脾気虚と弁証し、当帰芍薬散を処方した。6週間の服用で月経時の腹痛は7/10程度、11週間には3/10程度にまで改善した。登校できるようになり、手足の冷えも改善した。

● 症例3 28歳 女性、主訴：下腿浮腫(図6)

本症例は、妊娠14週から下腿浮腫が目立つようになり、下肢痛も出現するようになった。脾虚水腫、血虚と弁証し、当帰芍薬散を処方した。服用2週間後には、下腿浮腫は改善傾向となった。

● 症例4 48歳 女性、主訴：浮腫(図7：次頁参照)

本症例は慢性糸球体腎炎の患者である。急性骨髄性白血病で入院化学療法を施行したが、施行前から輸液負荷によ

図4 症例1 17歳 女性

【主 訴】 月経の閉止

【現病歴】 9ヵ月前に精神的なストレスから体重が8kg減少し、その後から月経が閉止した。産婦人科にてホルモン検査等精査を受けるも明らかな異常はなく、当科を受診した。

【現症・漢方的所見】 ストレスは改善しているが、体重は2kg程度の改善を認めるのみであった。以前より腹痛をきたしやすく、食は細い。(月経があった時)月経周期は遅れる方で、1回の月経は4日間であった。手足が冷え、倦怠感がある。

身長 154cm、体重 38kg、色白。

脈診：細

舌診：胖大、薄白

腹診：腹力3/5、腹直筋緊張傾向

【弁 証】 血虚、脾気虚

図5 症例2 16歳 女性

【主 訴】 月経痛・手足の冷え

【現病歴】 再生不良性貧血で免疫抑制剤を内服中である。月経前日から3日目までの腹痛が強く、鎮痛剤の内服でも登校できない。低用量ピルの使用も検討されたが、ホルモン製剤の追加に抵抗があり、漢方治療を希望し当科を紹介受診した。

【現症・漢方的所見】 月経時には、腹部に差し込むような痛みがある。めまいやふらつきも出現し、朝も起きられない。普段から手足が冷えやすい。月経前はむくみやすい。食欲はあまりなく、胃もたれもしやすい。顔色がくすんだ白色。

脈診：細

舌診：舌胖大、淡、薄白苔

腹診：腹直筋緊張あり、左臍傍圧痛あり

【弁 証】 血虚血瘀、脾気虚

図6 症例3 28歳 女性

【主 訴】 下腿浮腫

【現病歴】 以前から月経前に下腿浮腫が出現しやすかった。妊娠14週から下腿浮腫が目立つようになり、靴が履きにくくなり、下肢の痛みも出現するようになり、20週で当科を受診した。

【現 症】 下肢が攣りやすい、眼の疲れあり。髪が抜けやすくなった。下腿の浮腫は指が4cm入り込む程度の浮腫あり。

脈診：滑 按じて細

舌診：舌胖大、薄白苔、水滑

【弁 証】 脾虚水腫、血虚

知っておきたい当帰芍薬散の基本と臨床のポイント

り生じた全身浮腫は利尿剤の投与でもコントロールが困難であった。当帰芍薬散の服用で浮腫はコントロールできた。

● 症例5 74歳 男性、主訴：腹痛(図8)

本症例は、約5年前から原因不明の腹痛を訴えていた。肝気横逆、脾気虚と弁証し、当帰芍薬散を処方した。2週間の服用で腹痛は2/10に軽快した。さらに常用していた

図7 症例4 48歳 女性

【主 訴】 浮腫

【現病歴】 慢性糸球体腎炎で蛋白尿が持続して浮腫が出現していた。今回、急性骨髄性白血病のために入院化学療法を施行中である。化学療法の施行前から輸液負荷をされていたため、体重増加が目立ち全身浮腫が生じたため利尿剤を投与したが、体重コントロールが困難であった。

【処方・経過】 当帰芍薬散を投与したところ、急激に利尿がついて浮腫のコントロールができた。

図8 症例5 74歳 男性

【主 訴】 腹痛

【現病歴】 大腸がんでS状結腸切除術を受けている(14年前)。また、多発結腸憩室で何度も憩室炎を起こしている。10年前にイレウスの手術を受けた。約5年前より腹痛が出現するようになり、特に排便前や食事の後で疼痛が増悪していた。この3年はほぼ毎日腹痛があり、ひどい場合には動けなくなるほど痛むようになったが原因は不明であった。腸管の周囲組織への癒着に伴う疼痛と考えられ、プチルスコポラミン臭化物を常用しているが症状は改善しない。

【現 症】 身長167cm、体重64kg。腹痛は差し込むような痛みと絞られるような痛みがある。痛みが腰部まで広がることがある。温めた方がよいが、明らかな変化はない。腹部は押さえた感じがするが、押さえた後でかえって腹痛が激しくなることも多い。情動による腹痛の変化なし。嘔吐なし。下痢と便秘を繰り返す。排便後にしばらく疼痛が増悪するが、その後痛みが改善する。下肢にごく軽度の浮腫あり。

舌診：白苔あり、舌下静脈軽度怒張あり

脈診：滑、やや沈、やや弦

腹診：腹部全体の腹力は低下、腹直筋の緊張が全体に強い

【弁 証】 肝気横逆、脾気虚

図9 症例6 42歳 女性

【主 訴】 全身倦怠感

【現病歴】 月経困難症に対して、高用量ピルを使用中。約1年前から全身倦怠感が出現した。かかりつけで加味逍遙散を処方されたが、2ヵ月間の内服後も症状の改善がなく、当科を紹介受診した。桂枝茯苓丸を4週間服用したが、症状は軽度改善のみであった。当帰芍薬散に変更し4週間服用したが、症状の改善したところと改善しないところが混在した。

【現 症】 動けるが動いた後で崩れ落ちるように疲れる。休むと次に動けない。イライラはしない。下肢は握りやすく、眼も疲れやすい。髪が抜けやすく、爪がもろくなった。むくみやすい、下腿浮腫軽度。月経があったときは、凝血塊が出ていた。足が冷える。

舌診：細

舌診：胖大、薄白苔、舌下静脈怒張あり

腹診：心下痞硬、腹直筋緊張あり、左臍傍圧痛あり

【弁 証】 血虚・瘀血

プチルスコポラミン臭化物を中止した。

● 症例6 42歳 女性、主訴：全身倦怠感(図9)

本症例は、約1年前から全身倦怠感が出現し、漢方治療による症状の改善は乏しかった。血虚・瘀血と弁証し、血虚に当帰芍薬散、瘀血に桂枝茯苓丸を選択した。服用開始から体が軽くなり、動いても体がきつくなりにくくなった。倦怠感は4週後に6/10、8週後に3/10まで改善した。

当帰芍薬散の諸症状への応用

当帰芍薬散の諸症状への応用を図10に示す。

当帰芍薬散の要点(図11)

当帰芍薬散の適応となる病態は、「肝血虚」「血瘀」「水湿」「脾気虚」「肝気横逆」である。

類縁処方との鑑別点について、加味逍遙散は肝鬱化熱・脾気虚、桂枝茯苓丸は瘀血や気逆に伴う症状がある。桃核承気湯は瘀血に加え、内熱の症状がある。四物湯は血虚の症状に加え陰虚・血瘀の症状がみられる。温経湯は上熱下寒、血虚に加え陰虚(乾燥症状)がある。

図10 当帰芍薬散の諸症状への活用

- 更年期障害(のぼせ、発汗、冷え、むくみ、めまい、動悸など)^{2,3)}
- 月経前症候群(生理痛、下腹痛、めまい、むくみなど)⁴⁾
- 月経困難症⁵⁾

図11 当帰芍薬散の要点

- 肝血虚：眼の疲れ、爪や髪の傷み、顔色がくすんだ白
- 血瘀：月経痛、末梢の冷え
- 水湿：むくみ、白色帯下
- 脾気虚：腹痛を起こしやすい、下痢/便秘
- 肝気横逆：腹部の引きつるような、差し込むような痛み

≪他の処方との鑑別点≫

加味逍遙散：肝鬱化熱(イライラ、のぼせ)、脾気虚(下痢/便秘、腹痛)

桂枝茯苓丸：瘀血(月経痛、凝血塊、色素沈着)、気逆(動悸)

桃核承気湯：瘀血(月経痛、凝血塊)、内熱(のぼせ、興奮)

四物湯：血虚(眼の疲れ、月経量低下、筋肉のこわばり、爪や髪の傷み)、陰虚(ほてり、乾燥)、血瘀(末梢の冷え、月経痛)

温経湯：上熱下寒(上半身のほてり、下半身の冷え)、血虚(眼の疲れ、月経量低下、筋肉のこわばり、爪や髪の傷み)・陰虚(乾燥)

参考文献

- 1) Akase T, et al.: Yakugaku Zasshi 123: 817-824, 2003
- 2) 箕浦茂樹 ほか: 産婦人科の実際 31: 1959-1966, 1982
- 3) 千村哲郎 ほか: 産婦人科の世界 34: 429-434, 1982
- 4) 八重樫聡: phil漢方 88: 16-17, 2022
- 5) 竹本由美: phil漢方 100: 12-13, 2024